

「何も言わなくても  
全部バレてる」——路地裏  
バーの年下バーテンダーに  
心も身体も読み尽くされて  
、朝まで離しても  
　　らえません

指が長い、と思ったのが始まりだった。

グラスを差し出すその手に視線を奪われて、受け取る瞬間に指が重なった。たったそれだけ。なのに触れた場所からじわりと熱が広がって、カウンターの向こうにいるこの人との距離がぜんぶ嘘みたいに縮まった。

「——お味、どうですか」

榊蓮。二十五歳。路地裏の小さなバー「Lilt」のオーナー兼バーテンダー。六つも年下の男の子。三ヶ月間、週に二、三回このカウンターに座って、完璧な一杯を作ってもらうだけの関係だったはずなのに。

「……おいしい」

「よかった。今日の桐島さんに合わせて作りました」

今日の、私に合わせて。この人はいつもそう言う。メニューも開かせない。注文も聞かない。ただ私の顔を見て、目を見て、嘘みたいに完璧な一杯を差し出してくる。

怒っている日は辛口。寂しい日は重め。頑張りすぎた日は、ぜんぶ甘く。

全部、当たる。三ヶ月間、一度も外さない。

——この人の前では嘘がつかない。

それが怖かった。三年前、元彼に言われた言葉がまだ胸に刺さっている。「お前と一緒にいると息が詰まる」。あのとき私は本音を見せたくなかったんじゃない、見せ方が分からなかったただけだ。

なのにこの年下のバーテンダーは、カウンター越しに全部読んでいる。

「桐島さん」

「……はい」

「今日、かなり無理してますね」

プレゼン前日。後輩のチームを守るために自分が「大丈夫」と請け負った企画が、明日の朝には通るか消えるか決まる。怖くて逃げるようにこの店に来た。閉店間際なのに。

「大丈夫です」

「嘘ですね」

反射的に顔を上げた。蓮の目が笑っていなかった。カウンターに片手をついて、ほんの少し身を乗り出している。——近い。

「桐島さんの『大丈夫』は全部嘘です。三ヶ月、一度も本当だったことがない」

涙が込み上げた。堪えた。三十一歳が年下のバーテンダーの前で泣くなんて。

「泣いていいですよ。——俺しかないんで」

その声があまりにも静かで、決壊した。

ぽろぽろ泣きながら「ごめんなさい」を繰り返す私に、蓮はカウンターの中から出てきて、隣に座った。何も言わずにハンカチだけ差し出して、大きな手で私の手を包むように握ったまま、泣き止むのを待っていた。

泣き止んだとき、終電はとっくに終わっていた。

「あ……タクシー呼ばなきゃ」

「——うち、すぐ上なんです」

蓮の声が一段低くなった。

「泊まってってください。……酔ってるでしょう」

酔ってる。でもこの人の前にいたいと思っているのは、お酒のせいじゃないことくらい自分で分かっていた。

＊

三階のワンルーム。思ったより生活感があつた。カクテルの試作用の小さなバーカウンターにボトルが並んでいて、本棚にはレシピ本に混じって心理学の本が何冊も。

「——桐島さんのことが分からなくて、勉強しました」

さらっと言われた言葉の重さを飲み込む前に、蓮がグラスをテーブルに置いた。沈黙が落ちる。部屋にはローファイの音楽もない。ふたりの呼吸だけ。

「あの、蓮く——」

立ち上がろうとした腕を、掴まれた。

振り向かされる。近い。目が合う。カウンター越しのあの目じゃない。剥き出しの熱がある。

「三ヶ月、ずっとカウンターの向こうで我慢してました」

唇を塞がれた。

柔らかいのに深い。舌が入ってくる。リキュールの甘い残り香がする。テイスティングみたいに舌先で口の中をなぞられて、膝から力が抜けた。

「ん……っ」

腰を抱き寄せられる。バーテンダーの所作じゃない。男の手だ。大きくて熱い掌が背中を這い上がって、スーツのジャケット越しでも体温が焼きつくように伝わってくる。触れた場所からぜんぶ蕩けていく。

息継ぎの際に蓮が額をくっつけてきた。吐息が唇にかかる。

「——俺、バーテンダーとして最低です。客に手を出すなんて。でも、もう無理でした」

年下なのに。こんな掠れた声を出す。こんな目で見える。

「酔ってるから……って言ったら、やめますか」

「酔ってるかどうかくらい、見れば分かります」

私の目をまっすぐ見て言った。

「桐島さんは今、酔ってない。泣いたら酔い、醒めるでしょう」

バレてる。酔いのせいにして逃げようとしたことまで。

もう一度キスされた。さっきより深い。舌を絡め取られて、自分の口から甘い声が漏れた。恥ずかしい。でも蓮の腕が微かに震えている。

——この人も、ずっと我慢してたんだ。

キスの合間に蓮が囁いた。

「着替え、貸しますね。そのスーツじゃ寝づらいでしょう」

自分のシャツを脱いで差し出してくる。下はタンクトップ一枚。腕の筋が思ったより逞しくて——目を逸らせない。

着替えるために背を向けた私のブラウスのボタンを、後ろから蓮の手が外し始めた。

「——自分でできます」

「知ってます。でもやりたいんです」

一つずつ。ゆっくり。ボタンが外れるたびに指先が首筋の肌を掠めて、背筋を甘い痺れが駆け抜ける。ブラウスが肩から滑り落ちた。ブラの上から背中をゆっくり撫でられる。

「……泣きそうな顔してますよ」

耳元で囁かれて、全身に鳥肌が立った。振り向けない。振り向いたら自分から求めてしまう。

蓮のシャツを被せられた。大きい。柔軟剤と、かすかにリキュールの甘い残り香。

「今日はここまでにしましょう」

——え？

「桐島さんが自分から来てくれるまで、待ちます」

蓮がベッドの端に腰かけて笑った。さっきの剥き出しの熱を仕舞い込んで、また「バーテンダー」の顔に戻っている。

ベッドを譲られた。蓮はソファで寝ると言う。

横になっても眠れなかった。

シャツから蓮の匂いがする。唇にまだキスの感触が残ってる。背中を撫でられた指の軌道を身体がぜんぶ覚えている。

——「自分から来てくれるまで待つ」って。

ずるい。その「待つ」がどれだけ焦れたいか分かっているくせに。

太腿をきつく閉じた。蓮のシャツの襟を握りしめた。お腹の奥がじんじん疼いて止まらない。ブラウスを脱がされたときの指先。キスで舌を絡め取られたときの温度。背中を撫でた掌の大きさ。

一時間。眠れないまま。

シーツの上で何度も寝返りを打って、そのたびに太腿の間がじわり熱くなる。下着がじっとり湿っていることに気づいて、恥ずかしさよりもどうしようもない切なさのほうが先にきた。

——もう、無理。

ベッドから起き上がった。暗い部屋の中、ソファで目を閉じている蓮のそばに膝をついた。

「……蓮くん」

「——起きてます」

即答。寝ていなかった。最初から。

「……眠れない」

「知ってます。ずっとシーツの音がしてたから」

目が合った。暗がりの中で、蓮の瞳だけが光っている。

「……来てくれるんですか」

答えは言葉じゃなかった。蓮のタンクトップの裾を掴んだ。指が震えている。

蓮の目の色が変わった。仕舞い込んだはずの熱が噴き出す。

「——待てなかった。ごめんなさい、嘘です。待てない」

ソファから立ち上がった蓮に抱き上げられて、ベッドに押し倒された。

さっきまでの丁寧な手つきが消えている。貸してもらったシャツを一気に捲り上げられて、下着だけの身体に蓮の視線が落ちた。

「三ヶ月、カウンターの向こうからずっと想像してた」

鎖骨に唇を落とされた。舌先で窪みをなぞられて、きつく吸い上げられる。じわりと痕が残るほどの力加減に、お腹の底がきゅっと疼いた。

「あ……っ」

ブラのホックを外される。背中に回った手が迷わない——カクテルを作るときみたいに正確で、でもずっと切迫している。

胸を掌で包まれた。大きな手。蓮の手。カウンターの向こうでシェイカーを振っていた手が、いま私の胸を掴んでいる。指先が乳首を探り当てて、転がすように遊び始めた。

「ん……っ、あ……」

「——ここ、弱いですね」

耳元で低い声。

「さっき背中触ったとき、ここだけ鳥肌立ってたから」

見てた。着替えを手伝うふりをして、ぜんぶ調べてた。

指先が乳首をくるくると回す。爪の先で軽く引っかかれて、きゅ



っと摘まれて、また掌で包み込まれる。蓮の手は大きいから乳房がすっぽり収まって逃げ場がない。親指の腹がてっぺんを擦るたびにお腹の奥へ甘い痺れが落ちていく。

「やっ……そこ、ずっと……っ」

「ずっと触ってほしいんですか？」

「ち、がっ……」

「嘘。さっきからずっと腰、動いてますよ」

言われて気づいた。自分の腰が勝手に揺れている。恥ずかしくて力を入れて止めようとしたら、蓮の膝が太腿の間に滑り込んできた。

「——無理に止めなくていいです」

その膝で太腿をそっと割って、するりと手が下りてきた。下着の上から触れられる。指の腹が布越しに恥丘をなぞって、ゆっくり下へ。

「あ……っ」

「もうこんなに濡れてる。一時間ずっとこうだったんですか」

声にならなかった。うなずくことしかできない。恥ずかしくて顔を覆おうとしたら、蓮がその手を取って指を絡めてきた。

手を繋がれたまま、もう片方の手で触られる。

下着をずらされた。指先が直接触れた瞬間、びくんと腰が跳ねた。

「ひっ……」

クリトリスの包皮をそっと剥かれて、指の腹で直接撫でられる。ゆっくり、正確に、一番感じるポイントを探るように。圧を変えながら、反応を見ながら。

——カクテルの味を確かめるときと同じだ。

「ここですよ、一番感じるの」

耳元で囁かれた瞬間、腰が浮いた。

「なっ……なんで……」

「見てれば分かります。桐島さんの身体は嘘つけないから」

心と同じだ。この人の前では何もかも隠せない。「大丈夫」も「平気」も全部見抜かれる。三ヶ月間カウンター越しに心を読まれてきたのと同じように、今度は身体をぜんぶ読まれている。

くちゅ、と音がした。蓮の指が割れ目を上下して、そのたびに自分の中から溢れた蜜が指を濡らしていく。

「あ♡ ……んっ……あ♡」

「いい声」

中指がゆっくり入ってきた。長い指が奥の壁を探るように曲がって、自分でも知らなかった場所に触れる。

「あっ……そこ……っ！」

「——ここだ」

自分でも触ったことのない場所を、この人が一発で見つける。怖い。怖いのに気持ちいい。指がその一点をぐりぐりと押し上げるたびに下腹部に熱が集まって、ぐちゅぐちゅと卑猥な音が部屋に響く。

「やだ……音……っ」

「やだって顔してないですよ。——もっと欲しそうな顔してる」

二本目の指が加わった。きつい。でも蓮の指は待ってくれない。